

東風迎母來
來時芳菲路
聞雞卽裏足
不言兒足疲
獻母一杯兒亦飲
五十兒有七十母
南去北來人如織

北風送母還
忽爲霜雪寒
侍輿足槃跚
唯計母輿安
初陽滿店霜已乾
此福人閒得應難
誰人如我兒母歡
送つた時の作。

母を送る路上の短歌（頼山陽）

東風に 母を 迎えて 来り

北風に 母を 送つて 還る

来る 時は 芳菲の 路

忽ち 霜雪の 寒さと 為る

鶏を 聞いては 即ち 足を 裏み

輿に 侍しては 足 槃跚たり

児は 足の 疲れたるを 言わず

唯 母の 輿の 安きを 計る

母に 一杯を 献じて 児も 亦 飲む

初陽 店に 満ちて 霜 已に 乾く

五十の 児に 七十の 母 有り

此の 福人間 得ること 応に 難かるべし

南去 北来 人 織るが 如きも

誰人か 我が 児母の 飲に 如かんや

語釈 ※路上にみちのほどり。※東風
に春風。※北風にきたかぜ。※芳菲に
草が青々と生え、花が美しく咲き、に
おっているさま。※雞に夜明を告げる
難の声。※即ち即刻。すぐさま。※裏
足に草鞍をはき、脚絆をつける。旅の
仕度を整えること。※槃跚に足をひき
ずる。※初陽に朝日。※南去北来に南
方へ去り、北方より来る。

通釈 春風が吹く三月、母を広島から
京都にお迎えし、北風のすさぶ十月の
末、京都から広島にお送りする。母上
を迎える時は、道野辺に花が咲き良い
香を漂わせていたのに、お送りする今
は、霜が降り、雪も降る寒い季節となっ
ている。暁を告げる雞の声に出発の用
意をし、母の駕籠に寄りそい、道中の
景色を説明し、足を引きずりながら歩
く。しかし、自分の疲れなど問題では
ない。母の駕籠が揺れずに、安らかで
あることを、計るのみである。旅店に
立ち寄り、母に一杯の飲み物を召し上
がって戴き、自分も飲ませて戴く。

店の中は朝日がさし、霜も溶けて暖か
になる。ホッとした気分になり、疲れ
も抜ける心地がする。五十の児に七十
の母がある。この幸せは、人間世界に
まことに得がたいもの、求めようとし
て求められるものではない。漸く人の
往来もはげしくなり、南から北、北か
ら南と、機でも織るように人が流れて
行くが、これだけの人の群の中に、だ
れが、わが母子の喜びに及ぶ幸せを
もっているであろうか。